ASSOCIAÇÃO CENTRAL NIPO-BRASILERA NOTÍCIAS E INFORMAÇÕES

ブラジル特報

No.1624
2015年1月号

大特集
『日伯外交関係樹立120年の歩み』

新次元のブラジルと日本
駐日ブラジル大使　アンドレ・コヘーア・ド・ラーゴ

あの町この町
フロリアノーポリス

0円

一般社団法人 日本ブラジル中央協会
URL http://nipo-brasil.org/　E-mail info@nipo-brasil.org
〒105-0003 東京都港区西新橋 1-1-15 物産ビル別館　TEL:03-3504-3866　FAX:03-3597-8008　発行人：大前孝雄／編集人：岸和田仁

世界をむすんで、
未来をひらく。

ブラジルとめざす、明日がある。

事業投資を軸に総合力を活かし、
新しい価値を。

鉄鉱石の生産・販売で世界最大のシェアを誇る
ブラジルのヴァーレ社に、2003年から経営参画。

食糧の安定的な
供給のために。

子会社シングー社は
東京都23区の2倍に相当する土地で農業を展開。

ガス需要の拡大に応え、
暮らしや産業に貢献。

国営石油会社ペトロブラス社・州政府と共同で
ガス配給事業を推進。

BRA
2014-0827-321

挑戦と創造
三井物産
www.mitsui.com/jp

目　次

〈あの町この町〉フロリアノーポリス …… 3
山口達朗

【特集】日伯外交関係樹立120年の歩み
新次元のブラジルと日本…… 4
駐日ブラジル大使　アンドレ・コヘーア・ド・ラーゴ

【特集】日伯外交関係樹立120年の歩み
ルセーフ大統領再選と
日ブラジル外交関係 120 周年 ……5
髙瀬　寧

【特集】日伯外交関係樹立120年の歩み
修好 100 周年から 20 年間の
ブラジルの変化と日伯関係…… 6
子安昭子

【特集】日伯外交関係樹立120年の歩み
日本ブラジル経済関係の
更なる飛躍に向けて……8
飯島彰己

ビジネス法務の肝
これだけは知っておきたい
ブラジル競争法の基礎知識と留意点 …… 9
井本吉俊

日系企業シリーズ　第 33 回
「ブラジルみずほ銀行」誕生
多様な遺伝子を持つ銀行…… 10
加藤清巳

〈連載エッセイ〉ブラジルにおける私のレア体験 …… 11
川上直久

〈ウーマンアイ〉在ブラジル日本人子女たちの教育に思う …… 12
清水裕美

〈ジャーナリストの旅路〉タフさこそがブラジルの強さ …… 12
倉沢美左

文化評論
レジストロ入植百年史
『一粒の米 もし死なずば』を熟読する …… 13
岸和田仁

〈最近のブラジル政治経済事情〉大統領選挙（決選投票結果）…… 14

イベント／新刊書紹介／協会からのお知らせ …… 14

写真家田中克佳の
「表紙のひとこと」

毎年、1 月におこなわれるサルバドールのボンフィン祭。宗教混交の複雑な歴史を今に伝える行事です。
（65 年生まれ、早稲田大卒、博報堂入社。93年に退社後、渡米し独立。ニューヨーク在住。www.katsutanaka.com）

あの町、この町

フロリアノーポリス

アメリカの旅行雑誌「コンデナスト・トラベラー」が発表した『世界で最もフレンドリーな都市』の人気投票第 1 位（2013 年）に選ばれたフロリアノーポリス（ちなみに、2 位は豪タスマニア州の州都ホバート、3 位がブータン王国の首都ティンプー）は、ブラジル南部に位置するサンタカタリーナ州の州都であり、人口約 40 数万。サンパウロから 700km、空路で約 1 時間の距離にある。島と本土と周辺の小島からなる都市で、牡蠣の養殖でも有名。ブラジルの海鮮料理「ムケッカ」も、牡蠣に海老そして貝、魚やイカ、タコなどの具が満載で、地元産のハタもある。また、海老のパステル（揚げパイ）や、クラムのパステルも人気がある。

18 世紀に入植したアゾレス諸島出身のポルトガル人によるとされる、魔女伝説などから「魔法の島」とも呼ばれる。また、海岸地帯の岩場に刻まれた先史時代の碑文や、石器を研磨した岩場の跡などを見ることができる。四季が比較的明確な土地柄であり、昨冬には、海岸線から見える大陸側の標高千メートルほどの山の頂きに、約 30 年ぶりに冠雪を観測してもいる。巻きずしを天ぷら風にカラッと揚げた「ホットロール」なども並ぶ日本食レストランも市内の至るところにある。

約 200 年前、江戸に向かう途中で難破した石巻の「若宮丸」が漂流後ロシアに漂着し、そのうち 4 人がロシア軍艦に乗船し、1803 年 12 月にフロリアノーポリスに修理のために寄港したことで、ブラジルの土を踏んだ最初の日本人とされている。

毎年 7 月頃から 11 月頃までの冬の時期には、子育てのために回遊してくるセミクジラを、近くの海岸で観察出来るフロリアノーポリスは、自然環境が豊かであるうえに、住民のルーツも多様だ。このハード・ソフト両面の多様性こそが世界中からやってくる訪問者の居心地を満足させるのだろう。

山口達朗
（CKC ブラジル事務所長）

日伯外交関係樹立120年

120年の歩み（肩書きは当時）

1895年　日本とブラジルが修好通商条約締結、外交関係樹立
1908年　初の移民船笠戸丸サントス到着
1984年　フィゲイレド大統領訪日
1996年　カルドーゾ大統領訪日
　　橋本首相訪伯
1997年　天皇・皇后両陛下訪伯
2004年　小泉首相訪伯
2005年　ルーラ大統領訪日
2006年　地上デジタルＴＶでブラジルが日本規格採用
2008年　移住100周年、皇太子殿下訪伯
　　ルーラ大統領、サミット時に訪日
2009年　日本人のアマゾン移住80周年
2014年　安倍首相訪伯

【特別寄稿】

新次元のブラジルと日本

アンドレ・コヘーア・ド・ラーゴ
（駐日ブラジル大使。日本ブラジル中央協会名誉会長）

2015年にブラジルと日本は日伯修好通商航海条約の120周年を祝います。この様な節目を記念して在京ブラジル大使館では日本側の関係各方面との協力の下に来たる7月から「フェスティバル br+jp@120」と銘打って文化関連および通商関連の一連の記念行事を計画しています。15年の記念行事は翌16年にも継続し、後半は特にリオデジャネイロ市で開催するオリンピック大会に焦点を当てます。この様な特別プログラムは単に両国間の絆を一層緊密化して両国の社会を互いに近付けるに留まらず、日本におけるブラジルの認知度をより高度な新次元に押し上げる目標を設定しています。15～16年に及ぶこれらの特別プログラムは両国の近代性と収斂目標を絵文字によって表現します：[<o>][o]。

2014年8月に安倍首相がブラジルを訪問した際に両国政府は双方の関係を「日伯戦略的グローバルパートナーシップ」の次元に押し上げる旨を宣言しました。常日頃から強調している事として、ブラジルと日本は各々が地域大国と見なされていますが、実際は両国ともグローバルな規模で重要なプレイヤーであり、より平和で、より公正で、より持続可能な世界の構築に取り組んできました。ブラジルが擁する200万近い日系人社会と日本に居住する約18万人のブラジル人就労者は両国の間に存在する強固な関係の基盤を成すものであり、常に関係の改善と向上を目指す推進力として機能して来ました。この様な両国間のパートナーシップをより揺るぎない物にするために、双方を合わせて3億2千万人を超える国民の全てを巻き込んで関係推進に取り組まなければなりません。

坂茂氏の設計による「2014年サッカーパビリオン」が大使館の正面を飾ったのは記憶に新しい出来事です。今回もまた、ブラジルのライフスタイルを日本の皆様に紹介する各種のイベントを計画しています。我々ブラジル人の価値観および文化に対する理解を推し進める事が今後の120年に対する最良の貢献だと考えます。

先だって傘寿のお誕生日を迎えられた皇后陛下が宮内庁記者会の質問に対して文書によるご回答をよせられ、文化が通常考えられる範囲を遥かに超えることを指摘しておられます。芸術と文化の意義について昭和42年の初めてのブラジルご訪問にふれておられます。

「建造物や絵画，彫刻のように目に見える文化がある一方，ふとした折にこれは文化だ，と思わされる現象のようなものにも興味をひかれます。昭和42年の初めての訪伯の折，それより約60年前，ブラジルのサントス港に着いた日本移民の秩序ある行動と，その後に見えて来た勤勉，正直といった資質が，かの地の人々に，日本人の持つ文化の表れとし，驚きをもって受けとめられていたことを度々耳にしました。当時，遠く海を渡ったこれらの人々への敬意と感謝を覚えるとともに，異国からの移住者を受け入れ，直ちにその資質に着目し，これを評価する文化をすでに有していた大らかなブラジル国民に対しても，深い敬愛の念を抱いたことでした」

この様な精神に則って、両国間の関係をより高い新たな次元に引き上げる取り組みにブラジル側と日本側の全ての関係者の皆様がご協力くださる様にお願い申上げる次第です。

（ポルトガル語の全文は協会ホームページでご覧になれます）

日伯外交関係樹立120年

ルセーフ大統領再選と日ブラジル外交関係120周年

髙瀬　寧
（外務省中南米局長）

2014年は、日本において、様々な形でブラジルに注目が集まる年であった。6月にはFIFAワールドカップ大会が開催され、多くの日本人がブラジルを訪問し、日本でもブラジルの様子が放映された。7月末から8月の始めには、安倍総理大臣がブラジルを含む中南米・カリブ諸国5か国を歴訪した。この歴訪には全体で延べ250人超の経済ミッションが同行し，官民をあげてブラジルとの関係強化に関心が高いことを印象づけるかたちとなった。さらに，日伯首脳会談では，両国の関係を伝統的な友好関係を礎として，地球規模の様々な課題に共に取り組む戦略的グローバルパートナーシップに高めることで一致した。

10月の大統領選挙は，直前のカンポス候補の事故死によるシルヴァ元環境大臣の立候補、第一回投票でのネーヴェス候補の台頭、決選投票でのルセーフ大統領の再選決定に至るまで、ブラジル国内外を問わず、いずれの識者も結果を予想することが困難な選挙となり、注目を集めた。今回の大統領選挙は，2003年から12年間続いた労働党政権に対する国民の評価を問う選挙でもあった。

思い起こせば、2013年6月、ブラジルの各地で大規模抗議活動が行われ、100万人以上の人々が参加した。それまで60%以上と高い数字を記録していたルセーフ大統領の支持率はこれを契機に30%にまで急落する。抗議活動に参加したのは、新しい中間層と呼ばれる人々で、より良い教育や医療、都市交通を求めていたといわれている。その後、ワールドカップの開催を無駄遣いと批判する人も現れる中で、昨年の選挙戦が始まる前の世論調査では、「変革」を求める人々の割合が8割近くに達し、「変革」は今回の選挙のキーワードの一つとなった。

最終的には，ルセーフ大統領が51%の得票率で、僅かの差ながら再選を果たした。現職の強みを生かした選挙キャンペーンを展開し，過去12年間に達成した貧困層を中心とした社会政策の実績や今後の政策について効果的にアピールし、伝統的な大衆層の支持を得たと言える。結局、「中間層」は選挙の大きな争点となり得なかったようにも見える。

これは外務省の先輩の受け売りであるが、ブラジルのような大国は急激に方向を変えることは難しいのであろう。大洋を行く大型船のごとく徐々に舵をきっていくということかもしれない。ルセーフ大統領も「変革」を公約している。世界的に経済成長が減速傾向にある中で、ブラジルを取り巻く環境も決して穏やかとは言えない。ルセーフ大統領の舵取りぶりが注目されるところである。

2015年、ブラジルでは第二次ルセーフ政権がスタートし、我が国においても昨年末の選挙を受けた政権が発足したところである。折しも、2015年は日ブラジル外交関係樹立120周年であり、日本とブラジルの双方で様々な行事がとり行われる。

日ブラジル外交関係樹立120周年は、安倍総理が昨年の対中南米政策スピーチで提示した三つの指導理念（共に発展し、共に主導し、共に啓発する）に沿って両国の関係をさらに発展させる好機である。インフラの整備や医療・保健、ICT協力の推進等、両国の現下の経済状況に鑑みれば両国が共に発展していく余地は大きい。また、2015年は国連安全保障理事会の改革や気候変動に関する2020年以降の新しい国際枠組みの策定など、両国が共に国際社会を主導していくべき、多くの課題がある。また、120周年の事業を通じて、我が国としても我が国の魅力や日本ブランドを積極的に発信するとともに、日系社会との関係強化を含め、人と人との絆を強めていくことを通じて、共に啓発していくことが重要である。更に、来年にはリオ・オリンピック・パラリンピック大会が控え，リオの次には東京オリンピック・パラリンピックが控えている。未来志向の日ブラジル関係の一層の強化・深化に向けて皆様方のご支援とご協力、そして積極的なご参加をいただければ幸甚である。

（本稿は筆者の個人的見解であり，外務省の見解を代表したものではありません。）

日伯外交関係樹立120年

修好100周年から20年間のブラジルの変化と日伯関係

子安昭子
（上智大学教授）

はじめに―120周年を前に『日本ブラジル交流史』を読み直す

日伯修好100周年を記念して発刊された『日本ブラジル交流史』（日本ブラジル中央協会、1995年）の最終章で、1995年時点での日伯関係の将来について6つの展望および提言が述べられている。

以下簡単に要約する。

（1）日伯関係の発展のために文化や学術交流の一層の拡大が必要であり、日系および非日系ブラジル社会との関係の緊密化が重要であること。

（2）日伯関係は伝統的に南北関係的な側面が強かったが、世界の中で両国の立ち位置が変化することによって、将来的には地域大国同士として国際社会で協力する側面が強くなること。

（3）日本はアジア太平洋経済協力会議（APEC）との結びつきを強める傾向にあり、ブラジルも南米にとどまることなく、オープンリージョナリズムの立場からアジア太平洋地域との関係強化が望ましいこと。

（4）日伯関係の発展の主導権はこれまで日本側であったが、今後はブラジル側に主導権が移ることが期待されること。

（5）日伯経済関係において従来は「政府と政府」のつながりが大きかったが、今後は「民間と民間」のつながりが中心となり、政府はその関係を補完する役割になること。

（6）従来からある日伯議員連盟や日伯民間経済合同委員会にとどまらず、将来的には賢人会議などの発足も視野に入れるべきであること。

日伯修好100周年の1995年から20年の間にブラジルは様々な意味において変化を遂げた。とりわけ経済や外交面におけるブラジルの変貌は大きい。本稿では、上記の展望や提言を参考にしながら、20年間のブラジルの変化を述べるとともに、日伯関係に与えた影響について筆者の考察を述べることにしたい。

国際社会におけるブラジルの立ち位置の変化

1995年はブラジルでカルドーゾ政権が誕生した年でもある。民主化から10年を経て、政治的にも安定を見せ始め、また94年7月のレアルプランの導入によって、ハイパーインフレからの脱却に成功したブラジルはカルドーゾ政権のもとで外交面でも積極姿勢に転じた。軍政時代には考えられなかった人権や軍縮などの問題を話し合う多国間協議にブラジルが参加する機会も増え、また『大統領外交』と称されるようにカルドーゾ大統領自ら多くの国を歴訪し、国際社会におけるブラジルのプレゼンスは大きくなった。この流れは2003年に就任したルーラ大統領によってさらに深化した。食糧やエタノールなどの資源ブームに後押しされる形でブラジルは安定した経済成長を続け、ブラジルに対する海外からの投資が増加、その一方でブラジル企業も海外への投資を行うなど、ルーラ大統領の積極外交とともに民間企業の海外展開を通して、ブラジルは国際社会の中で台頭するようになったのである。

ルーラ政権時代には南米外交や南南外交が強化された。南米統合はカルドーゾ政権から重要な外交戦略であったが、ルーラ政権のもとでパワーアップし、2007年には南米諸国連合（UNASUL）が南米12カ国参加のもとに誕生した（注：UNASULの前身は南米共同体CASA）。2008年に採択したUNASUL設立条約は「…政治、経済、社会、文化という多面的な統合の場を目指す」とあり、「民主主義の強化や不平等の根絶などを通して、南米諸国間の不均衡を是正する」ことがUNASULの主要な設立目的に掲げられた。ルーラ政権はさらにこうした考えをラ米やカリブ海諸国にも拡大し、2011年12月、ラテンアメリカ・カリブ共同体（CELAC）が誕生した。米国を含まないラテンアメリカとカリブ諸国33カ国による政治対話と統合のためのメカニズムを作る取り組みが開始されたのである。メルコスル、UNASULそしてCELACの3つは現在につながるブラジルの南米外交の柱である。

もう一つのブラジル外交の柱は南南協力である。インドや南アフリカと結成した「IBSAフォーラム」は3つの大陸を代表する民主主義国家間の対話フォーラムとして、2003年に発足、2006年以降首脳会議が開催されている。BRICSはすでに首脳会議開催が6回を数え、2014年7月には開催場所は2順目に入りブラジル・フォルタレーザで開催された。この会議では先に述べたUNASULやCELACメンバーとのジョイント会議も開催され、BRICSが他の地域機構とのつながりを模索する動きを示すものであった。IBSAやBRICSが国際社会にもたらす影響についてはより綿密な分析が必要であるが、ブラジルにとっては南米戦略同様に、新興国のリーダーという立場から世界に意見を発信する意味は大きいといえよう。この20年の間に、ブラジルの国際社会における地位は確かに変化し、日本のみならずブラジルとの対外関係を持つ国にとってそれは無視できない点である。

日伯関係のアクター：政府から民間へ？

上智大学イベロアメリカ研究所が発行する紀要『イベロアメリカ研究』に掲載されている「日本・ラテンアメリカ関係日誌」を1995年以降めくっていくと、2008年頃からブラジルにおける日本企業の動きが活発になっていることが読み取れる。エタノール、鉄鋼、石油など資源関連の企業から、大豆や食肉などは商社が中心となり、さらには金融や保険分野、医薬品（機器も含む）や化粧品など、進出する企業は多様である。

政府レベルでは1996年、2004年と2014年にそれぞれ橋本首相、小泉首相そして安倍首相のブラジル訪問があり、とくに小泉首相とルーラ大統領による首脳会議において「日伯21世紀協議会」の設置が決まり、2005年の第1回会議を経て、2006年7月の第2回会議後に小泉首相に提出された提言をもとに、「日伯戦略的経済パートナーシップ賢人会議」の設立が決まった。

この間ブラジル大統領の日本訪問はカルドーゾ時代に1回、ルーラ時代に1回にとどまっている。訪問回数は確かに少ないが、日本とブラジル両政府はインドやドイツとともに国連改革に向けたG4としての協力、またモザンビークの農業開発における2国間協力など、グローバルアジェンダにともに取り組んできた。現在の安倍政権は地球儀を俯瞰する外交として、積極的に世界各国首脳と会談を行っており、日本の国連におけるプレゼンスの拡大に前向きである。2015年は国連創設70年であり、日本とブラジルはG4の関係を生かし、今後とも国連改革に取り組むことが可能と思われる。

経済的にも外交的にもブラジルがこの20年間で変化する中で日本との関係はこれまでの南北関係的なスタンスから対等なパートナーへと変わってきた。日伯2国間の関係のみならず、日伯2国間で共有する課題（国際秩序、開発、食糧や環境―などいわゆるグローバルアジェンダ）に取組む関係へと変化を遂げた20年間といえよう。

おわりに

最後にアジア太平洋の時代と日伯関係について触れておきたい。現在は1995年当時以上に「アジア太平洋の時代」と言われるようになっている。ラテンアメリカの中にも太平洋同盟（メキシコ、ペルー、チリ、コロンビア）という自由貿易協定（FTA）が2012年にスタートした。2014年現在アジア太平洋地域ではAPECがあり、一部重なる形で環太平洋パートナーシップ協定（TPP）や東アジア地域包括的経済連携（RCEP）を巡る交渉も行われており、こうした地域的な枠組は日本の通商戦略において重要な場となっている。

一方のブラジルが属する地域統合はメルコスルである。20年間という大きな流れの中ではブラジルは以前に比べ政治的にも経済的にも安定し、それゆえに国際社会の中で新興国リーダーという立ち位置を得ることができた。しかしながら2011年にスタートしたルセフ政権1期目（～2014年）では、ルーラ政権時代の好調な経済は低迷し、外交的にもややブラジルは大人しくなったように見受けられる（サッカーワールドカップ開催、そしてその後のBRICS首脳会議はホスト国として積極的に取り組んだが）。

そうした背景には、国内に山積する様々な問題がある。政治家の汚職や後回しにされてきた構造改革（労働法や税制など）、またインフラ整備などである。加えて外交面では保護主義的と言われるメルコスルを重視するブラジルのスタンスに対して、アジア太平洋時代と言われる今日、ブラジルはどこに向かおうとしているのかが、今一つみえてこないという意見をしばしば耳にする。2014年8月の安倍首相のブラジル訪問に同行した日本企業による経済ミッションは、現地でビジネスフォーラムに参加し、その際にもブラジル経済の課題について言及した。日伯修好120年にあたる2015年1月に発足するルセフ政権2期目の取組ならびに明確な方向性が示されることを期待したい。

日伯外交関係樹立120年

日本ブラジル経済関係の更なる飛躍に向けて

飯島彰己
（一般社団法人 日本経済団体連合会／日本ブラジル経済委員長／三井物産社長）

日伯二国間関係が大きく前進した2014年。特筆すべきは、安倍総理大臣による日本の総理として10年ぶりのブラジル訪問で、私も経団連の日本ブラジル経済委員長として、榊原経団連会長をはじめとする経済界の幹部の皆様と同行する機会を得た。総理がサンパウロでの総括スピーチにおいて、“Juntos”の理念の下、日伯関係の緊密化を図っていくことを直接訴えられ、大変心強く思うと同時に、経済界としても、両国関係の強化のために、その役割を果たすことを改めて決意した。

日伯経済関係の一層の飛躍に向けた、今年の目標をいくつか申し上げたい。

第1に、経済連携の強化をあげたい。今日、世界各地で地域経済統合に向けた動きが活発化しており、経済界としても、現在交渉中のTPP（環太平洋経済連携協定）やRCEP（東アジア地域包括的経済連携）をベースに、アジア、北米、南米をカバーする「アジア太平洋自由貿易圏」（FTAAP）の構築を目指すべきと発信している。中南米最大の経済国であるブラジルにも、貿易投資の自由化やルールの調和に向けたこのような動きに積極的に参加して頂きたいと考えている。そこで、経団連では、ブラジル全国工業連盟（CNI）と共に、日伯経済連携協定の可能性について研究を行い、共同提言を策定すべく、双方間で覚書を交わし、作業に着手しているところだ。現地で活動を展開する企業の「生の声」を踏まえつつ、日伯経済連携協定の実現に向け、前向きなメッセージを発信していきたいと思う。

第2に、インフラ整備推進での協力である。インフラ不足がコスト高を招くいわゆる「ブラジルコスト」の問題の解消のため、物流インフラを中心に、ブラジル側から提示されているコンセッション案件などについて、協力の可能性を具体的に模索していくことが重要だと認識している。物流インフラの整備によって、農業分野を含め、ビジネスチャンスが大幅に拡大することは疑いの余地がない。そのためにも、官民間の適切なリスク分担、民間投資家に対する適切なリターンの保証、日伯両国の政府系金融機関による金融支援など、ビジネス環境の整備を着実に進めることが求められている。日本企業によるブラジルインフラ部門への投資に就いては、昨今いくつかの具体的事例が出てきているが、この流れを益々強化して行きたいと考えている。

第3に、イノベーションに向けた協働。現在ブラジル政府が推進している「国境なき科学」への協力、ICT等の日本企業の技術を活用した輸送システムの効率化、環境にやさしいインフラの普及等、ブラジルの持続的な経済成長に資する取組を推進して参りたい。

折しも、今年は日本・ブラジル外交関係樹立120周年。また、昨年再選を果たされたジルマ＝ルセフ大統領の訪日も大いに期待される。このように、重要な節目を迎える本年、日伯経済関係がさらに飛躍することを祈念している。

14年9月の日伯経済合同委員会であいさつする飯島日本側委員長

連載 ビジネス法務の肝

これだけは知っておきたい ブラジル競争法の基礎知識と留意点

井本吉俊
（弁護士。長島･大野･常松法律事務所パートナー。東大法学部、Harvard Law School 卒業＝LL.M）

近時、世界各国で「競争法」に基づく活発な取り締まりが行われており、企業法務に携わる者はもちろん、企業幹部や競争の最前線に立つ営業社員にとって競争法の知識は必須となったと言って過言ではない。加えて、ブラジルの競争当局（Conselho Administrativo de Defesa Econômica（CADE））は世界でも最も活発に競争法を執行している当局の1つとして知られており、ブラジル競争法は決して絵に描いた餅ではない。以下ではブラジル競争法上の企業結合規制とカルテル規制を紹介する。

事前の強制届出義務ー企業結合規制

企業間のM&Aを行う場合、各国当局への届出義務の有無、競争上の懸念を理由に取引が禁止されないか否か、禁止されなくともCADEへの事前届出と承認取得にどの程度の期間を要するかの把握は極めて重要である。

ブラジル競争法に基づき事前の届出義務が課される取引は、原則として、直近の事業年度におけるブラジル国内売上高が750百万レアル以上の会社グループと、同75百万レアル以上の会社グループとの間で行われる合併、持分譲渡、ジョイントベンチャーの組成等である。届出義務があれば、取引当事者はCADEに対し、取引概要や両会社グループの取り扱う商品役務の内容、市場シェア情報その他の市場の競争状況につき、CADE指定の届出書フォームに従って情報を記載した届出を行わねばならず、CADEから承認を得られるまで取引を完結させてはならない（強制待機期間）。

特に注意を要するのは、ブラジル競争法では他国の企業結合規制と比べて容易に届出義務が発生してしまうことである。たとえば、①「会社グループ」とは、連結関係にある親子会社にとどまらず、20%超の持分の保有・被保有の関係があれば有無を言わさず「会社グループ」として一体として認定されてしまう点、②持分取得の取引の場合、買い手側と売り手側の当事者との間に競合関係や部品・原材料等の供給関係がある場合には、たった5%以上の議決権割合の取得又は5%以下であっても筆頭株主となるだけで届出義務の対象となる点が見落としやすいポイントとして挙げられる。届出後、承認までに要するCADEの審査期間は最大330日間と非常に長いが、実際には、簡易審査の対象となった案件では平均21日間、通常審査の案件では平均71日間となっている（CADEの2014年9月5日付公表資料の2014年の実績＝2014年8月分まで＝に拠った）。なお、届出義務違反や届出後・承認前の取引強行に対してCADEは厳しい態度で臨んでおり、多額の制裁金を科した事案が存在している。

カルテル規制

競争者間の価格カルテル、入札談合、顧客分割、受注調整等がいわゆるカルテル行為として、世界各国で広く取り締まられ、厳罰が科されているが、ブラジルにおいても同様である。CADEは国内カルテルだけでなく、国際カルテルの取り締まりに関しても積極的であり、欧米その他の当局の公表処分事案を研究・検証した上で、同様の商品・事件関係者に対してブラジルにおけるカルテル行為の摘発を行うことも少なくない。CADEが欧米当局並みに厳しいカルテル規制の執行を行っている以上、競合他社の集まる事業者団体への参加等について、違法にならない線で続けるという方針ではなく、違法になりかねない行為を未然に防止する観点から必要性が非常に高いものを除き原則取りやめることも検討すべきであろう。

なお、カルテル行為があった場合のサンクションは、法人に対する制裁金として、カルテルの影響のあった事業分野の直近事業年度のブラジル売上高の0.1%から20%の賦課、法人の管理職に対する個人追加制裁金として、法人への制裁金の1%から20%の賦課（賦課がされないこともある）、カルテル行為に関与していた個人に対する刑事罰として罰金刑及び2年から5年の禁固刑の併科、と定められている。

「ブラジルみずほ銀行」誕生
多様な遺伝子を持つ銀行

加藤清巳
（ブラジルみずほ銀行社長）

ブラジルみずほ銀行は、2013年7月31日に開業したみずほ銀行のブラジル現地法人である。サンパウロを拠点にフルバンキングサービスを提供している。

みずほ銀行の母体である旧3行（第一勧業銀行、富士銀行、日本興業銀行）は、いずれも1973年にサンパウロに駐在員事務所を開設し、それぞれブラジルの地場銀行との資本・業務提携によりブラジル事業を拡大してきた。2002年に3行が統合しみずほフィナンシャルグループ（以下MHFG）が誕生すると、3行のサンパウロ駐在員事務所も統合しみずほコーポレート銀行（現在はみずほ銀行）サンパウロ駐在員事務所として再スタート、2007年にNY支店サンパウロ出張所にステータスを変更し営業してきた。

その後ブラジルの経済的・政治的地位が大きく向上していく中、MHFGはブラジルにおける更なる業務拡大の機会を探ることとなった。出張所では貸出・預金といった銀行業務は扱えない。お客様のニーズをより的確に把握し、より幅広いサービスを提供する為には何が必要なのか。その答えが現地法人設立だった。現法設立の検討を続けた結果、売却を検討していたドイツの銀行West LBのブラジル現地法人（WestLB do Brasil、以下WLBB）の買収を決定、2013年7月にブラジルみずほ銀行が開業した。MHFGとして初の外銀買収による海外拠点の設立である。

ブラジルみずほ銀行は設立1年半ほどの新しい銀行だが、みずほのブラジル拠点としての歴史は前述の通り40年超に及ぶ。さらに、買収したWLBBの歴史を辿れば業暦は100年以上となる。ブラジルみずほ銀行は、新しいけれども古く、欧州フレーバーを持ったブラジルの邦銀だ。

開業当時、お取引先のほとんどが旧WLBBから受け継いだブラジル地場企業と欧州系企業であった。その為、開業後は、日系企業のお取引先を1社でも増やすことに注力している。地場金融サービスはもちろん、ブラジル進出を検討しているお客様へのアドバイザリー業務、日本あるいは海外とブラジルの貿易に関連する貿易金融取引等、様々なニーズに応える体制を整備してきた。

また、非日系企業との取引深耕ももちろん業務の柱である。ブラジル地場企業、欧州系企業との取引には、旧WLBBの有していた顧客リレーションやマーケット知見、プロダクトノウハウが大きく寄与、開業後短い期間で非日系企業取引は大きく伸びてきている。

内部管理面においては、旧WLBBの管理手法をみずほ流に変更する作業が発生した。どちらかというと実務面を重視した旧ルール・手続きから、かなり細かいところまで規定されている日本流への変更作業は、膨大で忍耐が必要とされる業務ではあったが、優秀でまじめなナショナルスタッフの献身的な努力により順調に進捗している。ただ社内における電子決裁の多用化やペーパーレスを基調としたオペレーションなど、元外銀ならではの業務フローも多く、手続きを安易にみずほ化するのではなく、先進的・効率的な部分は逆にみずほへノウハウを逆流させる位の意識を常に持つように指導している。

ブラジル社会への貢献も重要なミッションと考えている。MHFGでは、毎年「みずほボランティアデー」を設定して各拠点が独自に考えたボランティア活動を行っている。ブラジルみずほ銀行でも、昨年は恵まれない子供たちの施設、今年は老人ホームを慰問し、行員、その家族含め80人以上が、食事の準備、ダンス、音楽演奏、サッカー、施設の修繕、等様々な活動を行った。ブラジル人行員はこのような活動には極めて積極的で日本人駐在員が驚くようなアイデアとバイタリティーを発揮した。弊行としては、銀行業務のみならず、このような地域活動にも積極的に参加し、ブラジル社会に貢献していきたいと考えている。

現在、みずほフィナンシャルグループでは、「One MIZUHO －未来へ。お客さまとともに 」というブランドスローガンのもと、グループ一体となった業務運営を推進している。ブラジル・日本・ドイツといった多様な遺伝子を持つブラジルみずほ銀行は、まさに「One MIZUHO」の精神を具現化し、お客様の企業活動及び社会に貢献する存在であり続けたいと思っている。

ブラジルみずほ銀行が入居しているオフィスビル

ブラジルにおける私のレア体験

川上直久
（協会理事）

私の18年余というブラジル駐在期間は長いようで短かったが、そんなブラジル駐在時代、なかなかレアな体験もあったので、三つほど徒然なるままにメモしてみたい。

1985年に当時絶頂期にあった歌手、アルシオーネをコパカバーナの彼女の自宅に訪問し、インタビューを行ったことがある。彼女は「愛のサンバは永遠に」の大ヒットで一躍サンバ歌手のトップとなり、1983年9月には日本公演も成功させている。そんな彼女を何故私がインタビューすることになったのか？それには裏話があり、だ。1977年に「ギター1本かついでサンバ修行に」という森本タケル氏の写真入り記事が現地邦字新聞「サンパウロ新聞」に掲載されたが、彼は帰国後、四谷のブラジリアン・パブ「イパネマ」で弾き語りをやっていた。そんな彼と1979年、私の一度目の駐在帰国後に「イパネマ」で知り合い、偶々住んでいるところが近かったこともあって、親しい友人になった。その彼がアルシオーネの「ブラジルの色彩」（Da cor do Brasil）のLP日本発売に際し、ライナー・ノートを書くことになり、そのためのインタビューを小生に依頼してきた。勿論レコード会社からの依頼なので、アルシオーネの住所・電話等個人情報も入手出来、インタビュー実施に至ったという次第だ。バラッタ・リベイロ通りに面した旧いマンションであったが、中は広く重厚な家具に囲まれたリビングでのインタビューとなった。彼女の出身地であるマラニャン州特産のガラナをご馳走になったが、ピンク色のガラナだったことが印象に残っている。

それから10年後の1995年1月1日にブラジリアのイタマラチで行われたフェルナンド・エンリーケ・カルドーゾ（以下FHC）大統領就任レセプションに出席することになった。「共和国軍紋章」（O Brasão das Armas da República）の金印付き金縁招待状を受け取ったまでは良かったのだが、下欄に「Smoking着用」と書いてあるではないか！これには焦ってしまったが、現地スタッフに訊いたところ、貸衣装屋で一式借りられることが判明、タキシード上下、蝶ネクタイ、エナメル・シューズ等一式を借りて確か75米ドル相当だったと記憶している。1月1日夜9時半からのレセプションではベロ・オリゾンテの新聞記者に写真を撮られたり、ブラジリアのホテルでは当時のペルーのフジモリ大統領の付き人に間違われてペルーの新聞記者団に追いかけられたり、であった。さて、ここで何故一介の商社マンに過ぎない小生が大統領就任レセプションに招待されることになったか？この点にも大きな裏があった。当時セニブラ社の伯側株主であるリオドセ社（CVRD、現在のVALE社）は半官半民の公社であり、セニブラ社長は政治人事であった。FHCが大蔵大臣としてレアル・プランを成功させた後、MG州のPSDB役員をしていたOtavio Ziza Valadares氏がセニブラ社の社長に任命されていたことから、セニブラ社の全取締役と伊藤忠サンパウロでセニブラ事業も担当していた小生にも招待状が届いたという訳だ。

同じ1995年のことだが、この年は日伯修好百周年の年で、日伯双方で様々な祝賀行事があった。ブラジルでの行事の資金の一部とすべく当時日系コロニアのドンと云われた橘富士雄氏（元南米銀行頭取、ブラジル日本商工会議所元会頭）が自動車メーカー6社（輸入販売していたトヨタ、三菱等含め）に要請し、車を寄付して頂きそれを景品とした籤を売り出した。当協会の常務理事を現在勤めておられる筒井氏が小生の上司として伊藤忠ブラジル会社の社長をされており、同時に商工会会議所の副会頭兼日伯交流促進委員長をなされていたこともあって、小生もその籤の社内販売を手伝うことに。結局、売れ残った数枚の籤を小生が買ったところ、何とそのうちの1枚が1等のトヨタ・カムリ（当時8万レアル相当）に当選！これには本当にびっくりしたものだ。

以上三つの体験を述べたが、森本氏、Ziza社長、筒井氏等との縁がなければ何れも実現出来なかったことばかりであり、これからも人との縁を大切にして行こうと誓った次第だ。

ウーマン・アイ

在ブラジル日本人子女たちの教育に思う

清水裕美（「ブラジルを知る会」主宰人）

自称ブラジル大好きおばさんの私。通算20年のブラジル生活者。好きが高じて日本食レストランまで開けてしまった。と言えば歴としたブラジル通を語っても許されるかも知れない。が、改めてブラジルのどこが好きって聞かれると、悩んでしまう。ブラジルのいい所はいっぱい紹介されているので、今回は、おばさん目線でブラジルに暮らす日本人社会を見つめてみたい。

ブラジル経済の上昇気流に乗って、この十数年日本の企業の駐在生活者も年々増え続けている。小さい子供さんのいる若々しい家庭も増えている。そうなると気になるのが、教育。欧米駐在ならまだしも、ポルトガル語が母国語となるブラジル。英語教育となれば、果てしない高額な授業料を払い続けなくてはならず、敢えて日本式教育に納まるならば、その後帰国子女枠で日本の受験を乗り切るのが唯一の選択にしてリスクとなる。子供たちは、長い人生で滅多に得られない海外での学校生活の中で、ひたすら日本に向かって日本式のお勉強に邁進しているのが現状だ。

私の場合は、悩んだ末、大きなリスクは承知の上で、アメリカ式教育を選んだ。親子共々、表面には見えない差別と偏見の中で戦っていたように思う。子供たちは、たくましく自分達のアイデンティティと向き合いながら、知的にも精神的にも鍛えられてゆき、30歳近くになった現在は、英語をネイティブに扱い母国語の日本語と第二の母国語であるポルトガル語も武器に変えて、彼らのビジネスにおいて、有利に利用しているようだ。この経験は親子にとって大きな財産として残っている。

だからといって、アメリカ教育を肯定し、日本教育を否定するものでもない。海外で暮らす、しかも、欧米ではない南米ブラジルで暮らすリスクをメリットに変えて世界に通用する子供たちを育てて欲しいと思う。何十年暮らしていても、常に日本に置き換えて考える私の様な日本人ではなく、堂々と胸を張って渡り合える未来の大人たちになってほしいからだ。

ジャーナリストの旅路

タフさこそがブラジルの強さ

倉沢美左
（東洋経済新報社記者。米ニューヨーク大学卒、日経米州総局記者を経て、09年から『週刊東洋経済』編集部）

「ずいぶん無謀なことするなあ」。

「BRICs最後の超大国の素顔、踊る！ブラジル」と銘打った60ページ以上の超大特集を「週刊東洋経済」で組んだのは2011年2月のこと。当時は、ルーラ前大統領の「ボルサファミリア」政策などの効果から新たな消費者層が台頭。国内消費の成長に目を付けた外資企業の参入も相次いでいるお祭りのような状態だった。「ぜひ盛り上がっている現地のルポを読みたい！」という編集者の強い思いもあって私が現地に飛ぶことになった。

とはいえ、ブラジルには過去に2度観光で訪れただけで知り合いはほぼ皆無。しかも取材依頼を始めたのが年末で、取材先の反応も芳しくない。ご存知の通り、ブラジルはコネがモノを言う国だ。コネもなければ時間もないという私は、ブラジルに長く駐在していた新聞記者の先輩からは冒頭の通り、あきれられてしまう有りさまだった。

取材の予定が思うように入らないまま、サンパウロに降り立ったのは11年1月。が、現地に着いてから状況が一変した。というのも、事前に連絡をとっていた元ブラジル東京銀行頭取の鈴木孝憲さんを皮切りに、元ペトロブラス総裁のシゲアキ・ウエキさんや元ブラジル中銀理事のパウロ・ヨコタさんなどするすると人脈が広がっていったのだ。しかも、皆さんとびきりに親切。鈴木さんとは何度もお食事をご一緒し、ブラジルの政治や経済、歴史について色々教えていただいた。ヨコタさんにはご家族とのランチに招いていただいた。このほか、現地で会った自動車会社の広報の方や主人の元同僚など毎日のように食事に誘ってもらい、孤独になる暇もないほどだった。

最終的にはブラジル・フーズ共同会長のルイス・ルフランさんにも話を聞くことができた。「やっぱり女性は得だなぁ」と現地のカメラマンさんにはからかわれたが、私が取材をできたのも「もっとブラジルを知ってほしい！」という現地の方々の熱い思いや、ブラジル人特有のサービス精神があったからこそだと思う。

それにしても驚いたのはブラジル人のタフさだ。朝7時から朝食をとりながら取材する機会が何度もあった。それでも夜はバーへ、クラブへ、サッカー場へと繰り出して行く。急成長している国の人々はやはりエネルギーがみなぎっているのだと身をもって感じた。

連載 文化評論

レジストロ入植百年史『一粒の米 もし死なずば』（無明舎出版）を熟読する

岸和田仁（『ブラジル特報』編集人）

ブラジルの邦字紙「ニッケイ新聞」で2013年6月22日から2014年2月18日まで、127回も長期連載された記事「日本移植民の原点探る レジストロ地方入植百周年」が、このほど一冊にまとまり、無明舎出版から刊行された。著者は同紙の深沢正雪編集長である。

筆者もこの著作を通読して、叙述内容の量と質に改めて圧倒された。超労作にして力作である。実は既に新聞連載中に斜め読みしていたのだが、やはり本になったものをまとめて読むのでは読後のインパクトが全くといっていいほど違う。レジストロ地域にスポットライトを集中的に当てた日本人移民入植史であるが、日本の近代史とブラジルのそれが相互反発し合ったり、重なり合ったりしてブラジル風カクテルに仕上がってくるプロセスが巧みな筆致によって明らかになってくるのだから、読む方としては本を握りしめて読み進むことになる。“面白い”というと語弊があるかもしれないが、出来の悪い推理小説よりもはるかに刺激的で、歴史上のナゾを解き明かしながら連鎖的に叙述が繋がっている歴史物語となっている。文章が読みやすいだけでなく、事前の調査も周到にして緻密であることも指摘しておくべきだろう。なにしろ、巻末に掲載された日本語やポルトガル語の参考文献の数は100冊を超え、インタビューした関係者の数も同等レベルとなっており、新聞記事というよりも、現地取材と文献調査を有機的に融合した、歴史社会学のケーススタディー論文集といっても通用する著作になっているからだ。

さて、ここで、この労作のアウトラインだけでも追いかけておこう。

サンパウロ州レジストロ市。サンパウロ市から南西に180kmのところに位置する中堅都市で、サンパウロ市と隣接州パラナの州都クリチーバ市とのちょうど中間地点だ。国道116号を行けば、今なら車で3時間ほどで着くが、100年前は、サントスに出てから海路でイグアッペ港へ行き、そこからリベイラ河を遡る、と3日もかかる僻地であった。地理的にも海岸山脈と大西洋に挟まれているため、降水量が多く高温多湿で、「サンパウロのアマゾン地方」と呼ばれたところだ。

そんな地方に、日本移民による植民地が三つ開設される。1913年開設の桂植民地、1914年のレジストロ植民地、1920年のセッテ・バーラス植民地、だ。当時はこの三つを「イグアッペ植民地」と総称していたが、桂植民地は、日本主導による最初の植民地であった。この入植計画を進めた「東京シンジケート」は、「伯剌西爾拓殖株式会社」（かつての南米銀行のルーツであるブラジル拓殖組合とは別）に改組されてブラジル移民にコミットしていく。大浦兼武、桂太郎、三宅雪嶺、杉浦重剛、渋沢栄一、高橋是清といった明治の政治経済界の重鎮が複数関わっているのが、このレジストロ地方への入植移民の特徴だ。植民地の名前に、首相桂太郎を冠したのは、その辺の経緯をよく示している。そんな国策的移住地に求められたことは、食糧不足の日本に米を供給する米作基地をつくろうというものだったが、結局、米作は成功せず、その代替として紅茶、バナナ、イ草などが植えられ、栄枯盛衰を繰り返していく。特にブラジル紅茶として有名になった茶産業は、その最盛期1980年代には、製品で1万トン以上もの生産規模を誇る基幹産業になっていた。

この古参移住地については、移民70周年の際編纂された『ブラジル日本移民70年史』には一言も書かれていない。何故か?と定番資料の移民史の行間を読み進む筆致は、推理小説よりもスリリングである。

ちなみに、タイトルは、新約聖書『ヨハネ伝』の一節「一粒の麦もし地に落ちて死なずば、ただ一つにてあらん、死なば多くの実を結ぶべし」から採られている。桂植民地は、麦でなく米の一粒であったという著者の言葉に、読者は無言で沈吟するしかないだろう。

最近のブラジル政治経済事情（外務省中南米局提供情報並びに現地メディア報道他より）

大統領選挙（決選投票結果）

10月26日に行われた決選投票の結果、ジルマ･ルセーフ大統領が再選された。有効投票数の最終得票率は、ルセーフ大統領（PT 労働者党）51.64% ネーヴェス候補 (PSDB 社会民主党) 48.36% であったので、3.2% の僅差であった。

外国銀行のブラジルからの撤退

中銀データによれば、2009 年には 233 の外国金融機関が操業していたが、現在も操業継続しているのは 163 であり、過去 5 年間で約 30%の減少となっている。この減少の原因としては、国際的な経済危機により公的金融機関が積極的に融資を拡大したことや、経済が脆弱化する中でブラジルの先行きが見えないこと、があげられている。

自動車産業の現況

過剰在庫を反映した生産調整の結果、1 月から 11 月までの累計自動車生産台数は 294 万台と前年同期比で 15.5% のマイナスとなった。一方、同期間の累計販売台数は 313 万台で前年同期比で 8.4% 減であり、また自動車業界の現在の雇用人数をみると 14 万 6 千人となっており、前年と比べ 1 万 8 千人が解雇された、という数値だ。

第三四半期の GDP

11 月 28 日に発表された第三四半期の経済（GDP）成長率は、前期に比べ 0.1% プラスとなった。とりわけ第二四半期まで四期連続でマイナス成長だった工業部門が 1.7% のプラスに転じたため、リセッションから抜け出す可能性がみえてきた。

新経済閣僚による新経済指標の発表

11月27日､新経済閣僚人事が発表された。ジョアキン･レヴィ新財務大臣は、IMFやIDBを経て、財務省主税局長、リオ州財務長官などを歴任したのちブラデスコ銀行グループの経営幹部も経験したテクノクラートで、財政規律重視論者として知られる。ネルソン･バルボーザ新企画大臣も財務省政策局長などを経験した実務派であり、中銀総裁はトンビーニ現総裁が留任。

市場の信用回復と経済の透明性を目指す彼らが 12 月 4 日発表した GDP 成長率見込みは､2015 年 0.8%､2016 年 2%､とマンテガ現大臣の楽観数値（8 月予算案提出時 3%,11 月に下方修正して 2%）の非現実性を確認した。

スペイン･中南米との架け橋として20年

スペイン語･ポルトガル語の イスパニカ

www.hispanica.org

ことばを学ぶ人にも、ビジネスマンにも、高品質で充実のサービスを提供いたします

通訳 翻訳

ビジネスから文芸まで経験豊富なプロがクオリティの高いサービスを提供

取扱い言語：スペイン語･ポルトガル語
英語･ フランス語･ドイツ語
イタリア語･ポーランド語

語学スクール

初心者はもちろん、中･上級者向けコースも充実の溜池山王教室

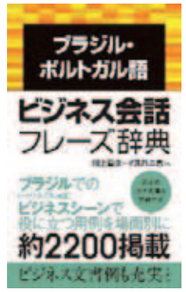
www.hispanica-academia.org

･通学
･通信添削
･オンライン ※ポルトガル語は通学のみ

書籍の執筆・編集

赴任、出張にはこれ！

安心のカナ発音
英語付き。



ミニマム文法やミニ辞典も掲載。
三修社刊

中南米の情報提供

スペイン通信社EFEの情報をもとに中南米の最新ニュースを日本語で

･中南米経済速報（週刊）
･政治･治安情報 “CRONICA”
（月～金の毎日）

企業語学研修

ニーズに合わせた効果的な研修

粒ぞろいの講師が、ビジネスを成功に導く語学力習得をとことんサポート。実践的なコミュニケーション力を最大限ひきだすレッスンをアレンジします。

（有）イスパニカ 〒107-0052 東京都港区赤坂 2-2-19 アドレスビル1F （銀座線･南北線「溜池山王」駅8番出口前）
Tel.03-5544-8335 Fax.03-5544-8336 hola@hispanica.org

広告掲載のお願い

「ブラジル特報」「協会ホームページ」

日本ブラジル中央協会の隔月刊の会報「ブラジル特報」、及びホームページへの広告掲載企業を募集しております。ブラジル特報に関しましては、14 年 9 月号より全面刷新をし、発行部数も 1500 部と大幅に増やしました。ホームページは、9 月より大幅に刷新し、明るく・読み易く・便利なホームページを目指しており、10 月より、数社のバナー広告を掲載しております。特報、又はホームページへの広告掲載にご興味がおありの企業は、協会事務局までコンタクトの上、ご相談下さい。

イベント 新刊書紹介 協会からのお知らせ

◆◆◆◆◆◆ 新刊書紹介 ◆◆◆◆◆◆

『図説 ブラジルの歴史』（金七紀男著）

本書の特徴は、風刺漫画、絵図、写真、図表など視覚に訴える部分を大幅に増やして、一般読者の歴史への “ 距離感 ” を圧縮した点にある。本文の歴史叙述は、通説を踏襲した教科書スタイルだが、六つのコラム（キロンボ、カヌードス戦争、土地なし農民運動、ブラジル･サッカーなど）と型破りのあとがきが、本文に飽きがくるかもしれない読者をリフレッシュさせる効果あり。ブラジルに関心を有する者には必携書といえよう。

（河出書房新社 2014 年 10 月 128 頁 1,850 円＋税）

『神戸移住センターから見た日本とブラジル』（黒田公男著）

南米への移住拠点となった神戸の国立移民収容所は、後に神戸移住センターとなり、一旦閉鎖されてから、現在は「海外移住と文化の交流センター」として国際交流の場となっている。ブラジル移民研究を長年にわたって継続してきたジャーナリスト（元神戸新聞編集委員、現日伯協会理事）が、このほど上梓した日本ブラジル交流史第三作は、この神戸移住センターを起点とする。例えば芥川賞第一回受賞作『蒼氓』の背景など興味深い。

（神戸新聞総合出版センター 2014 年 11 月 222 頁 2,500 円＋税）

『ラテン・アメリカ社会科学ハンドブック』（ラテン･アメリカ政経学会編）

1964 年に設立されたラテン・アメリカ政経学会は、「ラテン・アメリカと理解し合い、真の協調関係を築く上で、同地域に関する社会科学研究をさらに深めることを使命」ととらえる学会であるが、創立 50 周年を記念して包括的な研究ハンドブックが刊行された。同地域の政治や経済、国際関係あるいは社会運動や移民研究にも目配りされており、初学者にも実業関係者にも極めて有用な案内書に仕上がっている。

（新評論 2014 年 11 月 294 頁 2,700 円＋税）

『一粒の米もし死なずば』（深沢正雪著）

「笠戸丸」移民から 5 年後の 1913 年、レジストロ地方に開設された桂植民地など 3 か所の総称「イグアッペ植民地」は、日本への食糧供給を夢見た米作基地を確立すべく明治の政治経済界の重鎮が多数関与した国策的入植地であった。このパイオニア移住地の 100 年史が、事前の文献調査と現地取材を踏まえて、邦字紙「ニッケイ新聞」に長期連載され、このほど一冊にまとまった。本誌「文化評論」欄も参照。

（無明舎出版 2014 年 11 月 220 頁 1,900 円＋税）

『ブラジルからコンニチワ！』（いまいはるみ著）

サンパウロ市から東方向に約 100 キロのところに位置するサンジョゼ・ドス・カンポス市に住む著者の身辺雑記風エッセイ集。老年期に入った元文学少女の観察眼は意外と鋭く、花鳥風月を楽しむだけでなく、ブラジルという格差社会の断面を語り、老齢化進む日系社会を直視しているが、流行のファッションを眺める視線はなんとも優しい。ブラジルを前向きに捉えたい人には、お薦めだ。

（東京図書出版 2014 年 11 月 272 頁 1,500 円＋税）

◆◆◆◆◆◆◆ イベント ◆◆◆◆◆◆◆

第 31 回ランチョン・ミーティング

日時：2015 年 1 月 23 日（金）12:00-14:00
講師：武田千香氏（東京外国語大学教授）
演題：ブラジル－そのジェイチーニョの世界
場所：アークヒルズクラブ
（アーク森ビル イーストウィング 37 F）
地下鉄銀座線・南北線「溜池山王」駅下車
参加費：会員 5,000 円 非会員 6,000 円
（当日会場にて申し受けます）
ドレスコード：ジャケット着用

第 32 回 ランチョン・ミーティング

日時：2015 年 2 月 12 日（木）12:00-14:00
講師：田中克佳氏（写真家）
演題：カメラがみたブラジル
場所：シーボニアメンズクラブ
（千代田区内幸町 2-1-4 日比谷中日ビル 1F）
地下鉄「霞が関」駅または「内幸町」駅下車
参加費：会員 3,500 円 非会員 4,500 円
（当日会場にて申し受けます）
ドレスコード：スマートカジュアル

◆◆◆◆◆ ポルトガル語講座 ◆◆◆◆◆

冬季講座

（初心者／初級Ⅰ／初級Ⅱ／中級／上級､の 5 コース）が、1 月中旬より開講となります。詳細は、当協会ホームページを参照願います。

!!「びっくり豆知識」!!

ブラサカとブラジル

知っている人は知っているけど、知ると何か得した気分になる。そんなブラジル物知りコラムがこれだ。昨年 11 月、フットサルコートで戦う 5 人制の視覚障害者らの「ブラインドサッカー世界選手権」が東京で行われた。日本代表が過去最高の 6 位に入り話題になったが、注目したのは優勝したブラジルの圧倒的強さだ。略称までが「ブラサカ」と言い、まるでブラジルのためのスポーツのようだ。調べてみて驚いた。98 年にブラジルで世界選手権第 1 回が開かれて以来、ブラジルの戦績は 1 位、1 位、3 位、2 位、1 位だった。6 回目の今回は「2 大会連続 4 度目の優勝」だ。

「惨劇」とおそらく永遠に語られる 2014 ワールドカップ・サッカーでの対ドイツ敗戦。サッカー王国の名をズタズタにされたブラジルがリベンジを開始した。目隠ししてもやっぱりブラジルサッカーは強い。ちなみに宿敵ドイツは「ブラサカ」では 8 位に沈んだ。

「ブラサカ」は 16 年のリオ・パラリンピックの正式種目としても登録されており、ブラジルが「誇り」と「自信」を取り戻せればいいが。(W)

グローバル人材の採用なら

日経HRは、日本経済新聞グループの人材情報企業として、新卒向け就職事業、社会人向け転職事業、キャリア教育事業をメインに展開しています。
日経HR独自の情報に加え、日本経済新聞社や日経BP社のコンテンツをベースに就職活動、学び、スキルアップ、キャリアデザイン、転職などのHR（Human Resources）情報をインターネットや出版、イベントなどのクロスメディア展開により発信していきます。

日経キャリアNET

社会人のための転職サイト。日本経済新聞や日経・電子版、日経ＢＰ社の各種専門媒体を入り口としたビジネスに意欲の高い求職者と、人材を企業戦略の中核と意識する優良企業を結びつけます。

日経キャリアNET
http://career.nikkei.co.jp

キャリアコンサルティング（人材紹介）

エグゼクティブ、金融、ＩＴ系人材を中心に、人と企業をピンポイントで結ぶ人材紹介事業を展開しています。日経キャリアＮＥＴや日経グループ各媒体との連動やアライアンス・エージェントとの連携など、さまざまなご提案も行っています。

日経HR Executive
プロフェッショナル、エグゼクティブのための転職支援サービス

20代、30代のための転職支援サービス
日経HR AGENT
NIKKEI HUMAN RESOURCES

日経アジアリクルーティングフォーラム

アジア8ヵ国のTOP大生を日本へ招待し、面接できるイベントを毎年8月に開催しています。2014年は北京大学、シンガポール国立大学、チュラロンコーン大学、インドネシア大学等、103名が来日し30名が内定獲得しました。

NIKKEI ASIAN RECRUITING FORUM in 東京

日経メディアで複合プロモーション

日経新聞・日経電子版、日経BP専門媒体（雑誌・Web・メルマガ・フォーラム）を活用した日経メディアの複合プロモーションで人材採用活動をお手伝いします。

仕事の先の幸せを創造する会社

日経HR
NIKKEI HUMAN RESOURCES

お問い合わせ　株式会社日経HR　TEL:03-6812-7307
e-mail:webeigyo@nikkeihr.co.jp　https://www.nikkeihr.co.jp